

博士（人間科学）学位論文

臺灣原住民の相撲変容にみるアイデンティティ
：知本プユマの言説からのアプローチ

Identity seen in the Acculturation of Sumo done by
Native Taiwanese
：Approach from discourse of Chihpen Puyuma

2006年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

渡邊 昌史

Watanabe, Masashi

研究指導教員： 寒川 恒夫 教授

目 次

序章	1
1 問題の所在	1
2 先行研究	3
3 方法論	3
(1) 調査方法と対象	3
(2) 「語り」と「書く」こと	5
4 本論の構成	7
(1) 展開	7
(2) 作業概念	8
第1章 台湾原住民族及び調査対象地概観	11
1 台湾原住民族	11
(1) 原住民族の名称と民族分類	11
(2) 原住民族の歴史的概観	12
2 プユマと知本	15
(1) プユマ	15
(2) 知本	18
(3) 語り手	20
第2章 現代の卡地布小米収穫祭	31
1 収穫祭	31
2 知本相撲	42
(1) 知本相撲の実際	42
(2) 知本相撲の特徴	45
第3章 「理蕃」政策による原住民祭祀儀礼の変容	72
1 理蕃政策大綱	74
2 祭祀儀礼の「教化」	78
(1) 祭祀儀礼の「善導」	78
(2) 日本的価値観	81
3 「善導」の方向性	84
(1) 神社崇拜との一体化	84
(2) 理想的農村実現への夢	86
4 皇民化と神社崇拜	90

第4章 知本収穫祭の変容	95
1 日本統治時代	95
(1) 文献資料からの歴史的再構成.....	95
(2) 今日の「語り」から.....	106
(3) 皇民化、そして「敗戦」	108
2 中国化と天主教の受容	111
(1) パラクワンの禁止と「空間」の喪失.....	111
(2) 天主教の受容.....	114
(3) 天主教と収穫祭.....	117
3 文化の復興と継承	123
(1) 台東県卡地布文化発展協会.....	123
(2) 文化発展協会設立の経緯と歴史.....	125
(3) 文化の復興.....	126
4 知本文化から卡地布文化へ	132
第5章 知本相撲とアイデンティティ.....	143
1 プユマにみる相撲	143
(1) 文献資料にみる相撲.....	143
(2) プユマにみる相撲の種類.....	148
2 日本相撲の受容	152
(1) マリウォリウォスと日本相撲.....	152
(2) 日本相撲の受容とその論理.....	157
(3) 台湾総督府による相撲の奨励.....	169
3 知本相撲の変容	176
(1) 「敗戦」そして中国化.....	176
(2) 天主教と知本相撲.....	183
(3) 民族アイデンティティの再確認.....	184
4 歴史実践としての語り	186
結章	195
1 収穫祭と知本相撲	195
2 知本相撲とアイデンティティ	196
文献	198

凡 例

1. 通例「台湾」と称される中華民国の呼称は、国連加盟国間では「台湾」の名称が用いられていることや通例に鑑み、本論では「台湾」とした。
2. 本文中「国府」とは中華民国国民政府の略称であり、その軍隊の呼称も「国府軍」と略称して表記した。
3. 年代の表記は、原則として、日本国内および日本統治時代の場合は元号を用いて西暦を括弧で補い、戦後は西暦を用いた。
4. 資料の引用に際しては、次のような基準にしたがった。
 - ①旧字体の漢字は、原則として、人名を含めて通行の字体に改めた。
 - ②読みやすさを考慮して、適宜句読点を加えた。
 - ③仮名の清濁、平仮名と片仮名の表記については、文意を損なわない程度で、現代仮名つかいに改めた。
5. 当時の日本側の用いたさまざまな概念、呼称はそれ自体が政治的な意図性をはらんでいることに注意を要する。ただし、今日の学問状況ではすでにその政治的意図性に関する研究も蓄積されてきていることから、「」で注意を促す場合、「」を省略する場合を含めそのまま使用した。
6. 写真及び図表は、特に出典を明示してあるもの以外はすべて筆者の撮影・作成によるものである。

序章

1 問題の所在

台湾¹は「大日本帝国」（以下、日本という）が最初に植民地とした地域である。

日本による統治は明治 28（1895）年、日清戦争の結果により締結された日清両国講和条約²（明治 28 年勅令号外）に基づき、台湾が清国から日本に割譲されたことに始まる。そして、日本は台湾総督府を設置、台湾は日本の「南進基地」として重要な位置を占めた。以来約 50 年間、日本が第二次世界大戦の敗戦をむかえる昭和 20（1945）年まで植民地統治がおこなわれた。

今日、台湾と日本とは不思議な関係にある。1972 年の国交断絶によって両者の間には確かに外交関係は無いが、実務関係は実に親密である³。

文化面においても、台湾には「日本文化」が溢れているといっても過言ではない。多チャンネルのケーブルテレビからは常時、日本製のコンテンツが流れ、若者の間では会話の中に適当に日本語を交えて話すことがファッションとさえなっている⁴。また、日本語としての認識が薄く、台湾語化した言葉もごく一般的に用いられている。1995 年の映画「多桑」（トーサン）のタイトルそのものが日本語の「父さん」、そして意味もまったく同一であり、日本語の発音を台湾語表記したものである。この他にも弁当、畳、勘定、勉強、運転手など枚挙に暇がない。

また、李登輝・前総統に代表される、日本統治時代の教育制度に学んだ世代には日本に「親近感」を抱く人も少なくない⁵。

¹ 通例「台湾」と称される中華民国の呼称は、国連加盟国間では「台湾」の名称が用いられていることや通例に鑑み、本論では「台湾」とする。

² 一般的に「下関条約」ともいう。

³ 2003 年の日台貿易総額は約 454 億ドルで日本の貿易相手先として台湾は第 4 位。人的往来については、2003 年には SARS の影響で減少し、日本からの訪台者数は約 66 万人、台湾からの訪日者数は約 73 万人となった（日本国外務省ウェブサイト <http://www.mofa.go.jp/mofaj/>）。

⁴ このようなサブカルチャーの現象を「哈日」現象、そうした若者たちは「哈日族」と呼ばれる。詳しくは、酒井（2004）を参照。

⁵ 例えば、司馬（1997）に詳しい。

むろん、植民地統治下の圧倒的優位性からの強制的かつ一方的な文化的・思想的影響と、今日の自由意志に基づく双方向的な状況下における日本文化の流行とを一概に論じることはできないが、台湾における日本文化の影響は日本が台湾から撤退した後も直接的、間接的、あるいは有形、無形を問わずに台湾の精神文化、社会文化、物質文化の一部となって現在に引き継がれているといえよう。

本研究は、今日の台湾社会において日本文化が大なり小なり影響していると想起されるさまざまな文化事象のなかから、特にその端緒が植民地統治に求められるであろうこと、なかでも台湾原住民⁶社会にみる文化的影響についての考察をおこなう。具体的には、原住民族の一つであるプユマ（卑南族、Puyuma）で実修されている相撲を事例として取り上げる。

プユマが居住する台東市知本では、毎年7月に約1週間にわたって執り行われる収穫祭において徒競走、相撲、舞踊などが繰り広げられている。特筆すべきは、相撲における「土俵」の存在である。従来の相撲研究史において、世界各地にみられる相撲⁷のなかで「土俵」を持つ相撲は日本だけにみられ、故に日本の相撲は「土俵」の存在、それによって勝敗が決せられることで特徴付けられるとされてきた⁸。ところが、プユマにおいても「土俵」を持つ相撲がおこなわれている。

相撲は日本において国技とみなされ、そこには日本文化がとりわけ色濃く表象されている。また、国民国家創出の過程において容易に国策とも結びついてきた。よって、植民地主義とスポーツの関係を論じるにあたって、相撲は格好の素材といえるのである。

そこで、本研究はプユマでおこなわれている相撲を、もともと実修されていた相撲が日本との文化接触、植民地化によって変容したものとみて、その論証を通じて彼らのアイデンティティを論じようとするものである。

⁶ 台湾の先住民族は現在「原住民」と呼ばれる。これは彼ら自身による「原住民運動」の成果によって、**1994**年に法律で定められたものである。詳しくは次章を参照のこと。

⁷ ここでいう「相撲」とは素手組み討ち格闘技のことで、もっぱら投げることで相手を倒すスポーツの総称である。相撲は数多くある格闘技のなかで最も古いものの代表格であり、地域と文化を問わず多くの民族によっておこなわれている。

⁸ 渡邊昌史（**2003**）世界各地の相撲&民族レスリング、**2004**「総合&組技格闘技」選手名鑑、日本スポーツ出版社：東京、pp.244-245。

2 先行研究

プユマの伝統的行事の先行研究としてまずあげられるのは、笠原政治（1980）がプユマ集落の一つである初鹿（台東市初鹿）の夏祭、冬祭を事例として、祭祀活動を社会的・宗教的背景から分析したものである。また、社会組織や言語に関しては陳文徳（1987, 1989, 1999）、未成道男（1968, 1969, 1970, 1983a, 1983b）、宋龍生（1964, 1965, 1995, 1997a, 1997b, 1998a, 1998b）、蛸島直（1990, 1995a, 1995b, 1997, 1998a, 1999, 2000a, 2000b, 2001a, 2001b, 2003a, 2003b, 2004）などの多くの研究がある⁹。

これに対し、本研究が取り扱うプユマにみる相撲を対象とした研究、そしてアイデンティティの研究は未だ着手されていない。

また、植民地主義とスポーツの関係については、もっぱら近代スポーツを対象として文化伝播の視点から分析した研究がおこなわれてきた¹⁰。これに比し、本研究は先住民社会で実修されている民族スポーツがいかに関わりを持ったのかを変化と不変化の相からとらえようとする立場に立っている。

3 方法論

(1) 調査方法と対象

本研究は、筆者のフィールドワークによって得られた聞き取り情報と、脚注及び巻末にあげた諸文献から成っている。

筆者は、2003年4月から台東市知本にて継続して調査をおこなっている。その経過は2003年4月の予備調査に始まり、SARS（新型肺炎）騒動で一端中断のやむなきに至ったが2003年9月に調査再開。そして、2004年6月調査、2004年7月収穫祭の参与観察、2004年12月狩猟祭に帯同しての山行、2005年1月

⁹ 但し、調査対象地は幾つかの集落に限定されており、知本はまったく取り上げられてこなかった。その理由としては「キリスト教の影響により伝統的祭祀や儀礼が著しく衰退していた」（蛸島、1998）というように、いわゆる本質主義的な関心からおこなわれてきたためであろう。

¹⁰ 例えば、グットマン、アレン著・谷川稔、石井昌幸他訳（1997）スポーツと帝国。昭と堂：京都。

除喪祭の参与観察、2005年3月調査、2005年7月収穫祭、12月狩猟祭、2006年1月除喪祭の参与観察である。いずれにおいても短期集中の調査であるが季節を変えて訪れ、個人宅に滞在し、知本の人々と可能な限り日常生活を共にしてきた。

聞き取りは、一般的なインタビュー形式の他、時と場所を問わずに自由に話していただく方法をとったが、その比重は前者から後者に徐々に移行していった。2004年12月の調査からは、筆者の問題設定や興味関心を能動的に問うのではなく、あくまでも受動的に話しかけられる機会を待ち、自由に話してもらい、語り手の話したいこと、すなわち「問わず語り」にひたすら耳を傾けた。それは、彼らの「語り」のなかにこそ「文化」が表象されているのではないかと考えたからである。

インフォーマントは日本統治時代の教育制度によって日本語教育を受けた世代（以下、日本語世代という）を対象とした。それは二つの理由による。一つは日本との文化接触、植民地化を直接的に経験していること。さらには、戦後の知本社会において主導的立場にあったこと。二つ目として、彼らの多くは戦後、半世紀以上経た今日でも日本に対して様々な形での記憶と関心を持ち続けている。そんな彼らの語りに、日本人であり、かつ同世代を両親にもつ筆者が真摯に向き合ってみたいと考えたからである。

インフォーマントの「語り」は、語られる相手あるいは文脈によって、その知識や情報が選択的に利用されているとするならば、彼らが誰に対して語るのかによって、表象される「文化」も様相を異にするのではないだろうか。

本研究で取り上げるのは、知本の日本語世代の「語り」である。そして、この語りはインフォーマントから筆者に対し、日本語によって提供されたものである。よって、本研究は筆者と知本の日本語世代との日本語による意思疎通に基づく相互行為のなかで導き出された共同作業の果実である。この過程において、異文化理解における避けがたい翻訳と解釈の作業は、可能な限り最小限度にとどめられたのではないかと考える。

(2) 「語り」と「書く」こと

台湾原住民で「土俵」をもつ相撲がおこなわれている事実を知ったのは、台湾原住民文化を紹介するビデオをたまたま見ていた時であった。タイトルからプユマで実修されていることが判るのみであった。

2003年4月初旬、はじめて知本駅に降り立った。「土俵」をもつ相撲の手掛かりはたった一つ、台東市内で得た「知本の方でやっているようなことを聞いた」という漠然とした情報だけであった。

ガイドブックでは、知本は村をあげて伝統文化を守り復興に取り組み、青年集会所が復元されている旨が記されていた。レンタルの原付バイクで駅頭を後にすると、すぐに特徴的な形の男子集会所が目にとまった。そばにいた年配の方にカタコトの中国語で尋ねると、確かな本語で返答があった。そして、その方の友人でトウモクの高明宗氏に一宿一飯の恩義を受けた。

翌日、同書に「プユマ族の伝統をモチーフに改装された」とあった知本天主教（カトリック）教会を訪れた。ベトナム人聖職者に来訪の目的を話すと、一緒に集落を廻って往時を知る人を探してくれた。そこで出会ったのが「増田さん¹¹」だった。そして、「イトコ弟はトウモクだから」と「鳥井さん」を紹介された。鳥井さんの自宅にはさまざまな人々が集う。そこで隣家の「ジロさん」、義兄の「先生」と出会い、知本の輪は広がっていった。

このように調査地選定には偶然の要素が強い。コネクションがあった訳ではなく、また「調査許可」を得ていた訳でもなかった。このような方法に対して、先達から次のような趣旨の指摘を受けた。

外国で本格的に調査しようとするならば、関係諸機関からの了解をとる必要がある¹²。

調査が認められていないのに、発表することにどれだけの価値があるの

¹¹ インフォーマントについては、次章を参照のこと。

¹² 現地で正規のフィールドワークをおこなうために調査ビザの取得や公的機関の手続きが義務化されているところもある。これらの地域では、観光ビザで入国してフィールドワークを実施することは法的には違法となる（須藤健一編（1996）フィールドワークを歩く、嵯峨野書院：京都、p.185）。

か。

筆者は考える。「誰のための、何の許可なのか」。かつての独裁国家、軍事政権、また東アジアのごく一部の地域以外に外国人が立ち入ることに対して、「了解」を取る必要があるのか。ましてや、今日の台湾は自由主義国家である¹³。

また、この指摘はポストコロニアリズムの文脈において、一見すると正論のようにも受け取れる。しかし、台湾原住民の置かれてきた立場を考えるならば、彼らの意識においては今日でもなお「外来政権」によって統治されているといえよう（写真1）。「行政機関からの許可を得る」ことによって「調査が認められる」というが、そのプロセスを以ってことさらに正当化するならばこれこそ「研究者の良心」という名の驕りではないのか。つまり、新植民地体制の庇護の下でフィールドワークをおこなうことに何ら変わらないのではないだろうか。

指摘の後段、「書く／書かれる」の問題も存在する¹⁴。しかし、「書く権利」は誰にでもあるし、それに「反論する権利」も誰もが持っていると思う。むしろ重要なのは、書くことの責任をどうとるのかという問題なのではないだろうか¹⁵。

「東アジアの国ですが、国によっては日本の人類学者が日本語で書くものもチェックしていて、だから次の調査に対して制限してくることを恐れている人類学者は結構います¹⁶」。調査者が自ら「検閲」をおこなっていないと言い切れるのだろうか。

「鳥井さん」は筆者に言った。

¹³ ただし、台湾の山地には入山許可証が必要な山地管制区がある。そこでは、国家安全法に則り、山地経常管制をおこなっている。

¹⁴ 写真 19-2 参照。「新聞記者」というフィールドワーカーが写真撮影している場面であるが、フィールドワーカーとしての「邪魔者性」を象徴的に表しているといえよう。実は、この直前に付近で子どもが水遊びをしていたが退いてもらった。その後、「聖」なる方向に今度は「書く」人間が立った。

¹⁵ 遠藤央（2002）政治空間としてのパラオ：島嶼の近代への社会人類学的アプローチ、世界思想社：京都、p.5。

¹⁶ 現代思想、1998年6月、青土社、p.41。「文化人類学の可能性」の鼎談における清水昭俊の発言。

渡邊さん。渡邊、でいいね。あなたと私の間なんだから。

何でも聞いてくれたらいい。何でも話すから。そして、見たとおり、聞いたとおりのことをそのまま書いてくれたらいい。そして、それを読んだ人が知本のことを知って、知本に来てくれたらなおさらいい。

筆者は考える。書かれ、そしてそれが公表された時点で、書き手はさげがたい批判の下にさらされるという責めを負うと。

4 本論の構成

(1) 展開

本研究は、知本の収穫祭でおこなわれている相撲を1個のスポーツ文化複合とみて、その変化の位相からアイデンティティをめぐる問題を論じようとするものがある。相撲変容を分析するにあたっては、相撲を収穫祭から切り離して扱うのではなく、それを文化事象として在らしめている収穫祭を全体として考察する必要がある。なぜならば、相撲は収穫祭との関連においてその意味を表しているのであり、また収穫祭は知本の文化において重要な位置を占め、知本の文化を理解する際には何よりも欠かせないものであるからである。

このような展望のもと、次のように論じてゆく。

第1章では、台湾原住民族及び調査対象地を概観するとともに、知本プユマの主なインフォーマントの歴史的経験を記述することによって「語り」のもつ文化的背景を明らかにしておく。

第2章では参与観察をおこなった2004年及び2005年の卡地布小米収穫祭で執り行われた行事を時間軸に沿って詳述する。

第3章では、日本統治時代の原住民政策である「理蕃」政策によって原住民の祭祀儀礼がどのように変容したのかを文献資料から考察する。これは、第4章及び第5章で知本の事例を論じるにあたり、原住民社会における知本社会の特殊性を浮かび上がらせるためでもある。

第4章では、知本の収穫祭の変容について論じる。はじめに日本統治時代の文献資料と今日の語りの分析から収穫祭の歴史的再構成をおこなう。次いで、

収穫祭の担い手の帰属するパラクワン（男子集会所）の変容、天主教（カトリック）の受容に焦点をあてて、収穫祭の考察をおこなう。これによって知本社会における収穫祭もつ文化的意味を明らかにする。

第5章では、知本相撲の変容からアイデンティティの考察をおこなう。はじめに日本統治時代の文献資料からプユマでおこなわれていた相撲について確認する。次いで、知本における日本相撲の受容と戦後における変容からアイデンティティについて論じる。

（2）作業概念の設定

本研究遂行の必要上、次の作業概念を設定した。

知本相撲

本論で取り扱う相撲とは、最広義に定義される素手組み討ち格闘技とする。そして、現在の知本でおこなわれている、もしくは過去において実修されていた相撲を総称して「知本相撲」と定義する。

知本プユマ

台東市知本に居住する、もしくはそこにアイデンティティを希求するプユマを知本プユマと定義する。ただし、知本では自らの集団を指す自称として「プユマ」はほとんど用いられることなく、もっぱら「チポン」である。

知本日本語

知本の日本語世代は、日常会話は母語で、母語にない概念や数詞には日本語の単語を借用し、時には日本語でコミュニケーションをとっている。よって本論では、知本で使われている日本語（単語を含む）を区別する意味で「知本日本語」という言葉を用いる。

カティプル語

知本プユマの母語は、一般的には「プユマ語」（卑南語、Puyumic）と称され

ているが、集落間の差異も小さくない。よって本論では「カティプル¹⁷語」とする。知本日本語では「自分たちの言葉」、「蕃語」、「高砂の言葉」と表現している。

¹⁷ 「カティプル」については **p.19** を参照のこと。



写真 1

原住民の側から、「台湾」の統治者
交代をとらえたモニュメント
(原住民族文化園区)

百歩蛇(パイワン、ルカイのトー
テム的存在)が誕生してしばらく
は、外来統治者はいなかった。

だが、スペイン、オランダ、明、
清、日本、そして中国国民党と次々
と現れては交代してきたことを表
している。